

無名の詩人，半ば未知の詩人，不遇の詩人：ヴェルレーヌ『呪われた詩人たち』のロジック

倉方，健作
東京理科大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1495149>

出版情報：Stella. 33, pp.237-247, 2014-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

無名の詩人，半ば未知の詩人，不遇の詩人

——ヴェルレーヌ『呪われた詩人たち』のロジック——

倉 方 健 作

『呪われた詩人たち』

ポール・ヴェルレーヌ（1844-1896）による『呪われた詩人たち』（初版 1884 年，増補版 1888 年）の価値は表題の妙にある，と断じてしまうのは乱暴にすぎようか。「呪われた詩人たち (poètes maudits)」——名詞と形容詞のシンプルな結びつきは，それだけに読者の心をとらえ人口に膾炙した。世間に認められぬ文学者像の類型としては，もはや紋切型と言ってもいい。

だが『呪われた詩人たち』は，名のみ高く読まれることの少ない部類の書物であろう。陽の当たらぬ詩人たちの存在を 19 世紀末の読者層に知らしめた文学史上の意義はもちろん認められるべきだが，歴史的文脈から切り離して本文を眺めれば，書き手に「批評家」としての姿勢と資質が欠如している印象は否めない。以降の「呪われた詩人」等をめぐる考察の著しい深化と無縁ではないにせよ，強烈な魅力を放つ引用の合間に配された緩衝材のごとき文章を「批評」として再評価しようとする試みは，おそらく徒労に終わるであろう。高い知名度に比して同書にかんする論考は意外なほど少なく，いささか複雑な出版経緯とヴァリエントをもつにもかかわらず，拠るべき校訂版もごく限られている¹⁾。

他方で『呪われた詩人たち』の精読と検討は，ヴェルレーヌの名が高まる過程と，背景となる 19 世紀末の文壇状況を把握するためには不可欠な作業といえる。40 歳を迎えて詩人が上梓した同書は，最初の散文による著作であり，ヴァニエ書店から出された第一作でもある。本稿では，自らの過去と伝説を切り売りしながら世紀末の文壇に棲息する「後期ヴェルレーヌ」のはじまりを告げる『呪われた詩人たち』執筆の経緯を検証し，構成の特徴とロジックを明らかにしたい。

第1集：コルビエール，ランボー，マラルメ

単行本に先行する雑誌掲載から整理しよう。連載が予告されたのは、当時の週刊文芸紙『リュテース』（毎号4頁建て）79号（1883年8月3-10日号）である²⁾——

『リュテース』は近々の号でポール・ヴェルレーヌによるたいへん興味深い研究を連載する。題名は「呪われた詩人たち（第1集：トリスタン・コルビエール，アルチュール・ランボー，ステファヌ・マラルメ）」である。

以降、断続的にコルビエールが3回，ランボー5回，マラルメ3回，計11回が連載された³⁾。予告の段階からコルビエール，ランボー，マラルメという同時代を生きた3人の詩人に対象を絞っているが，しかし「第1集」とすることで古今東西に例を求めながら連載を継続する余地を残している。

ところで，ヴェルレーヌがマラルメに承諾を求めたのは，予告が公になった直後であった——

聡明な若者たちによる瀟洒な小新聞『リュテース』に、『呪われた詩人たち』と題して一統きの論文を連載する予定です。

もちろんタイトルについては拙論の冒頭でしっかり説くつもりですし，そこには説明となり，一種の副題ともなる「絶対的詩人」という語を加えます。

じつは「第1集，トリスタン・コルビエール，アルチュール・ランボー，ステファヌ・マラルメ」という括弧書きを添えて，失礼を顧みずに，この研究をすでに予告させていただきました。

今回の連載にも，次回の，つまり最後の連載にも，お名前が挙がるのを望まれないのであれば，もちろんご意向に添うようにいたします。⁴⁾

すでに名前が予告に挙がった以上，マラルメには断りにくかったであろう。それがヴェルレーヌの策略だったかどうかは判断しがたいが，少なくとも彼がマラルメの不安を取り除こうと配慮して，連載の冒頭で「呪われた詩人たち」を「絶対的詩人たち（Les Poètes absolus）」と呼び代えたのは確かである——

平穩を望むなら「絶対的詩人たち」と呼ぶべきだったが，平穩など現代では通用しない〔…〕。

想像において絶対的であり，表現においても絶対的，そして最良の世紀における「純然たる王」のように絶対的なのである。

しかしながら、呪われているのだ！⁵⁾

とはいえ、彼がこれ以降『呪われた詩人たち』に「絶対的詩人」の語をもちいることはない。冒頭部分は大ラルメのみを念頭に置いた文面の観があり、『イジチュール』の著者に投げかけられた「絶対的」という語の選択は、絶妙であると言うほかない。

2歳年長の詩人にたいするヴェルレーヌの配慮はこれに留まらない。大ラルメにとって、ランボーはただ一度の邂逅に終わった少年⁶⁾、コルビエールのほうは完全に未知の名であった。ヴェルレーヌは『リュテース』誌に関わる青年詩人シャルル・モリスに「ところで大ラルメはコルビエールについて何と言っている？」⁷⁾とも尋ねており、大ラルメの考えを常に意識していた様子が窺われる⁸⁾。しかし同者にかんする「研究」が周到に準備されていたわけではなく、それどころか掲載の間際まで、文中で引用する作品さえ目処をつけていなかったのである——

『呪われた詩人たち』はもうすぐ掲載されます。[…][あなたの]章(もしくは数章)は『リュテース』誌に2週間後に載るでしょう。拙文がお気に召すようお願いしておりますが、そのためにも未発表作品を頂戴したいのです！ 大至急で！⁹⁾

敬意よりも甘えが、さらには旧友を利用しようとする意図さえもが透けて見える。コルビエール、ランボーに続いて大ラルメの名を出すことが先決であり、「研究」の内容は副次的なものにすぎない——ヴェルレーヌ自身がそう考えていたとすれば、連載当時の彼の姿勢は、『呪われた詩人たち』の歴史的意義とタイトルの創意しか認めない後世の評価にまさしく映し出されていよう。連載に基づく単行本は1888年4月、253部が刊行された。

第2集：デボルド＝ヴァルモール、ヴィリエ・ド・リラダン、「哀れなレリアン」

初版から4年後の1888年、マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモール、オーギュスト・ヴィリエ・ド・リラダン、そして「哀れなレリアン」¹⁰⁾の3詩人をくわえた増補版が刊行された。成立の経緯は初版に比べてやや複雑である。

当初から連載継続の余地を残してあったことは先に引用した大ラルメ宛書簡で見たとおりである。第2集の連載が予告されたのは『リュテース』紙156号

(1885年1月18-25日)においてであった——「我々は近日中に『呪われた詩人たち』の第2集、デボルド=ヴァルモール夫人、ヴィリエ・ド・リラダン、哀れなレリアンを掲載する」。だが連載の開始は遅れ、3カ月後の168号(4月12-19日)に以下の文章が掲載される——

かなり深刻な体調不良のため、我らの友にして協力者でもあるポール・ヴェルレーヌ氏は『呪われた詩人たち』の第2集を仕上げられずにいる。そのため掲載は今から1カ月後あるいは6週間後となるだろう。

期限の6週間が経過した174号(5月24-31日)に載ったのはヴェルレーヌ自身のメッセージであった——

パリ, [1885年] 5月16日

親愛なる友人たちへ
 それでは(間違いなく)2週間後の予定で『呪われた詩人たち』第2集を予告してくれたまえ。不—

ポール・ヴェルレーヌ

度重なる遅延に、ヴェルレーヌの個人的な事情が影響していたのは間違いない。1885年2月には、別居中の妻との離婚による精神的痛手から泥酔して他人の家に侵入しただけでなく、実母に対する殺人未遂で告訴された。告訴と反訴とで3つの裁判を抱え、その結果3月24日に禁錮1カ月と500フランの罰金を課されている。「かなり深刻な」の表現はまったく大仰ではない。「マルスリーヌ・デボルド=ヴァルモール」の冒頭はようやく『リュテース』紙176号(6月7-14日)に掲載されたが、続編は発表されなかった。「体調不良」に金銭上の不如意がくわわり、左足には水腫が出来たうえ、翌年1月21日には母を喪ったためであろう。この時期のヴェルレーヌは自らを省みて、「呪われた」という形容詞を何度も反芻したに違いない。

「マルスリーヌ・デボルド=ヴァルモール」はその後『ラ・ヴォーグ』誌2号(1886年4月18日号)に再掲載されるが、『リュテース』紙からの変更理由は定かではない¹¹⁾。同誌3号(4月25日号)に「マルスリーヌ・デボルド=ヴァルモール」の続編、7号(8月7-14日号)に「哀れなレリアン」が掲載された。「ヴィリエ・ド・リラダン」のみ雑誌掲載はなく、1888年8月31日刊行の『呪われた詩人たち』増補版が初出である¹²⁾。刊行部数は600部と初版の倍以

上に増えており¹³⁾、背景には4年間で高まった著者の知名度と文壇での地位の確立があったと考えられよう。

「無名の」「半ば未知の」「不遇の」

「呪われた」(maudit) という形容詞にヴェルレーヌはいかなる思いを込めたのか。連載中のモリス宛書簡では「劫罰を受けた詩人たち (ces poètes damnés)」とも呼んでいるが¹⁴⁾、含意が最も明確なのは本文中の「ステファヌ・マラルメ」末尾、すなわち第1集の総括部分である――

擱筆しよう。賛辞は洪水と同じく、ある絶頂をもって終わるものだ。

それに我々の目的は達せられた。然るべき人々の眼前に必要とされる詩を提供したのであり、繰り返して言えば、「文学」のためにこれらの貴重な名を相応しく遇するよう主張しえたことは名状しがたく誇りに思う。無名、半ば未知の名、不遇の名、すなわちトリスタン・コルビエール、アルチュール・ランボー、ステファヌ・マラルメの名前を！¹⁵⁾

この一節に第2集の構成を重ねあわせれば、ヴェルレーヌが言わんとするところはより明確になる。第1集と第2集のそれぞれの構成方法にはある相似が認められる。「無名の」コルビエールとデボルド＝ヴァルモール、「半ば未知の」ランボーとヴィリエ・ド・リラダン、「不遇の」マラルメと「哀れなレリアン」――。コルビエールとデボルド＝ヴァルモールは、ある時期までヴェルレーヌ自身にとっても「無名の」存在であった。前者はモリスから、後者はランボーからの啓示で彼が知った、世を去って久しい詩人たちである¹⁶⁾。ランボーとヴィリエ・ド・リラダンは、文壇ではある程度知られていたものの、一般の読者にとっては「半ば未知の」詩人である。すでに詩を棄てて居所も定かではない過去の友人という点も共通している。最後に置かれたマラルメと「哀れなレリアン」は、同世代の高踏派の詩人たちが受けつつある社会的な光輝とは無縁の場に身を置く「不遇の」詩人と見なすことができるだろう。

とりわけ重要なのは、おそらくは『呪われた詩人たち』を連載する契機となった詩人コルビエールの「発見」である。1875年に29歳の若さで没した1歳年下の詩人を、ヴェルレーヌは1883年初頭までまったく知らずにいた。唯一の詩集『黄色い愛』(1873年)が、『歌詞のない恋歌』(1874年)と同時期の刊行であ

る事実を知った驚きは大きかったに違いない。ヴェルレーヌは「魂の兄弟」を見つけたのだとモリスは言う¹⁷⁾。

もしコルビエールという「無名の詩人」の存在がなければ、『呪われた詩人たち』第1集はランポーとマラルメという、著者に近い詩人を並べるに留まり、普遍性を獲得できないばかりか、単なるルサンチマンと捉えられる可能性もあっただろう。「トリスタン・コルビエール」に示されているのは、読者よりもほんの少しばかり先んじた「呪われた詩人」発見の喜びと驚きであり、旧知のランポー、マラルメを語る手つきとはまるで異なる。

「無名の詩人」「半ば未知の詩人」「不遇の詩人」を配置して『呪われた詩人たち』を構成する平衡感覚は、自らの分身である「哀れなレリアン」を早急に第1集に含めようとはしなかった冷静な判断、一種の客観性にも繋がるものだろう。完全に「無名の」詩人にはじまり自己宣伝に終わる構成はヴェルレーヌの思惑に適っている。彼が第2集をくわえた計6人分の原稿を完成させたのち「コルビエールとレリアンに加筆してもいい」とヴァニエに提案している点に¹⁸⁾、冒頭と掉尾を飾る詩人に対する思い入れの強さが窺い知れようか。

「ヴィリエ・ド・リラダン」の違和感

ところで、『呪われた詩人たち』を繙く読者が、やや違和感をおぼえる肖像は「ヴィリエ・ド・リラダン」であろう。プレオリジナルが存在しないという情動的な差異ばかりではない。彼を「詩人」と呼ぶのはあまり一般的ではあるまい。しかも文壇で一定の成功も収めており、当時から作品も比較的容易に入手できた点も他の「呪われた詩人たち」と大きく異なる。興味深いことにヴェルレーヌは、同時期に書かれた『今日の人びと』においてこのヴィリエ・ド・リラダンを「絶対的詩人」の名で呼んでいる――

読者は、この断片〔＝『エレン』〕を知った後で、かの絶対的「詩人」を訪問するなら、いかなる血筋で、どれほど重要な「作家」を相手にしているのが理解できよう。比較的僅かな詩しかものしていないにもかかわらず、詩人たる彼は、間違いなく当代の誰よりもそうだからであり、少なくとも今世紀の真の詩人たちに引けを取らないからである。¹⁹⁾

ヴェルレーヌが以降も滔々と述べ立てるのは、散文を主とする作家だが本質

は詩人である、という比較的単純な論旨である。「絶対的」という語も、むしろ文中の「相対的に (relativement)」に対応しており、あくまでもヴィリエ・ド・リラダンを「詩人」に分類するために必要な手続きに過ぎない。同様の操作は『呪われた詩人たち』においても繰り返される——

ヴィリエがすでに燦然と榮光に輝き、彼の名が最も深い反響に運命づけられ、果てしない後世へ向けて発しているにせよ、それでもやはり我々は彼を「呪われた詩人たち」に分類しよう。なぜなら、その足下にあるはずの現代では、彼ははまだ十分な榮譽に浴していないからだ。²⁰⁾

「詩人」であること、「呪われた」存在であることを躍起になって説明すればするほど、ヴィリエ・ド・リラダンの登場が場違いである印象はかえって強まる。この違和感、異物感は、執筆の経緯に起因する可能性が高い。第2集の計画をモリスに示す1883年11月16日付の書簡において、ヴェルレーヌはヴィリエ・ド・リラダンについてこう語っている——

『呪われた詩人』としての（それなら新シリーズの）ヴィリエ、それはいい、すごくいい、——だがまったく知られていないヴィリエのことを語る必要があるし、そのためには彼から『モルガヌ』『イシス』——人目につかずに刊行された美しい作品群！——を手に入れる必要があるだろう。これらにくわえて、『クレール・ルノワール』と、彼自身は駄作と見なしている（冒瀆だ！）そのほか未刊の残酷物語が載った『ルヴェ・デ・レットル・エ・デ・ザール』もだ。彼は16、7年前にその編集長をしていたのだ。とりわけ『クレール・ルノワール』は見事な狂気と度肝を抜く真の良識（他に言いようがない！）の作品だよ。『新たなイヴ』も必要だろう。だが方策は？ ヴィリエに会うとして（とても興味をそそられるが）、いったいどこで？ これらの作品を渡すことには同意してくれようが、しかしそれらを持っているだろうか？²¹⁾

旧友ヴィリエ・ド・リラダンの名が唐突に現れた感があるが、おそらくなにかモリスの提案に答える返信なのだろう²²⁾。ここでヴェルレーヌが引用すべき作品に思いを凝らすことは、『呪われた詩人たち』の特徴を踏まえるなら、当然なことと見なせよう。未所有のコルビエールの詩集、自分だけが持つランボーの詩篇、マラルメに「大至急で！」と頼んで送らせた未発表詩篇、これらの得がたい資料が連載の要であることはヴェルレーヌ自身が理解していた。実際に翌日の書簡でもモリスに「ヴィリエと、文字通り呪われた彼の作品について書

いたことを読みましたか」²³⁾と尋ねている。しかし結局ヴェルレーヌはこれら「呪われた」作品を発掘する手間を取らず、当時も入手可能であった戯曲『反抗』と『新世界』の一節、『残酷物語』に挿入されている詩篇を引用するに留めた。つまり「ヴィリエ・ド・リラダン」にかんしては、入手しがたい作品を読者に示すという原則を完全に放棄したのである²⁴⁾。

「ヴィリエ・ド・リラダン」の座りの悪さは、『ラ・ヴォーグ』誌のギュスターヴ・カーンに原稿を委ねた際の添え状にも窺える。手紙のなかでヴェルレーヌは「ヴィリエ（『呪われた詩人たち』第2集の3番目か、どちらかと言えば2番目の肖像）」²⁵⁾と記しており、この時点でも構成にいささか迷いがあったことが見てとれる。書状の末尾には「順序——デポルド＝ヴァルモール、ヴィリエ、P・レリアン」という決定版に繋がる書き込みがあるが、構想から長らく居場所の定まらなかった「ヴィリエ・ド・リラダン」の本文があたえる違和感は、読者以上にヴェルレーヌ自身が感じていたように思われる。

結びにかえて

以上確認してきたように、「呪われた詩人たち」各人とヴェルレーヌが取り結ぶ関係は一様ではない。それでも全体がある程度の統一感を保ち、社会から好評をもって迎えられたうえ、提示した概念が普遍化するまでの成功を収めた背景には、確かな構成のロジックがあった。ヴェルレーヌは、同時期に着手した『今日の人びと』では、同時代の「不遇の」詩人たちを紹介し続けたが²⁶⁾、『呪われた詩人たち』の第3集を執筆することはついになかった。いささか結果論めくが、19世紀末の文壇にマラルメ、ヴェルレーヌと同じ地位を占める詩人が出現しなかったことを考慮すれば、全2集、計6人をもって『呪われた詩人たち』を完結させた判断は妥当であったといえよう。著者にとっては生涯の誇るべき業績であったはずだ。晩年の1892年11月、ヴェルレーヌはハーグでおこなった講演会で矜持をもって同作に触れている。その一節を引いて本稿の結びにかえることとしたい——

当時いささか話題を呼んだ『呪われた詩人たち』という我が小著で、数カ月前に亡くなったアルチュール・ランボーという誰も知らない詩人が、長い忘却のなかから姿を現しました。その本では、やはり無視されていたふたりの詩人のことも真情をこめて正当に遇っています。すなわち、ブルトン人にしてパリジャン、酷薄にしてシニカ

ル、しかるに数多の詩句のなんとも素晴らしいコルビエール！〔…〕そして我が親愛なる友人マラルメ。やがて彼が然るべき栄光を見事に勝ちえるに先んじ、その名を挙げたことは私の大きな喜びでした。

少し経ってから私はこの小冊子の続編にとりかかり、3つの新たな考察をくわえました。気の毒で偉大なヴィリエ・ド・リラダン、尊敬すべきマルスリース・デボルド＝ヴァルモール、彼女はドゥエー出身ですからフランドルの女性です——そして哀れなレリアンという名の、我が最良の敵です。²⁷⁾

註

- 1) Paul VERLAINE, *Les Poètes maudits*, éd. Michel DÉCAUDIN, Paris : C.D.U./SEDES, 1982. デコーダンによるこの刊本は第1集については初版、第2集については増補版に基づく。本稿の引用も同版を用いた。プレイアッド版散文全集所収の『呪われた詩人たち』本文はすべて増補版に基づいている—— Paul VERLAINE, *Œuvres en prose complètes*, éd. Jacques BOREL, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1972, pp. 635-691. なおプレイアッド版は註で第2集の手稿も異稿として示しているが、デコーダンは考慮の対象から除外している。
- 2) 同紙は1882年に『ラ・ヌーヴェル・リーヴ・ゴーシュ』として創刊され、1883年4月から『リュテース』に紙名を変更した。本稿の引用にはスラトキン社刊行の複製合冊を用いた (*La Nouvelle Rive gauche* puis *Lutèce*, Genève : Slatkine Reprints, 1974)。同書はフランス国立図書館所蔵分に基づいており、63号の3-4ページ、149号、151号が欠落している。
- 3) 詳細は右のとおり——。「トリスタン・コルビエール」が82号(1883年8月24-31日)、83号(8月31日-9月7日)、86号(9月21-28日)。「アルチュール・ランボー」が88号(10月5-12日)、89号(10月12-19日)、90号(10月19-26日)、92号(11月2-9日)、93号(11月10-17日)。「ステファヌ・マラルメ」が94号(11月17-24日)、95号(11月24-30日)、100号(12月29日-1884年1月5日)。
- 4) 1883年8月16日付マラルメ宛書簡 (Paul VERLAINE, *Correspondance générale*, t. I, éd. Michael PAKENHAM, Paris : Fayard, 2005, p. 804)。
- 5) *Les Poètes maudits*, *op. cit.*, p. 19.
- 6) Voir «Arthur Rimbaud», in Stéphane MALLARMÉ, *Œuvres complètes*, éd. Bertrand MARCHAL, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1998-2003, t. I, pp. 120-128. 19世紀末の詩壇を象徴する3人が一堂に会した日付をマラルメ自身は書き残していない。マラルメ研究者は伝統的に1872年6月1日としてきた (voir Stéphane MALLARMÉ, *Correspondance*, t. V, éd. Henri MONDOR et Lloyd James AUSTIN, Paris : Gallimard, 1981, p. 351 ; Stéphane MALLARMÉ, *Œuvres*

- complètes, op. cit.*, t. I, p. LII)。一方でランボー研究者の多くは1871年12月2日としている (voir Jean-Jacques LEFRÈRE, *Arthur Rimbaud*, Paris : Fayard, 2001, p. 346 ; Arthur RIMBAUD, *Œuvres complètes*, éd. André GUYAUX, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2009, p. 409)。マラルメがランボーの「霜焼けで赤くなった大きな手」に言及していることを考慮すれば後者の日付が妥当と思われる。会合を主催していたグループ「醜いやつら」の活動を精査した最近の研究書もこの日付を採っている (voir Bernard TEYSSÈDRE, *Arthur Rimbaud et le foutoir zutique*, Paris : Léo Scheer, 2011, p. 468)。
- 7) 1883年12月7日付モリス宛書簡 (*Correspondance générale, op. cit.*, t. I, p. 803)。
 - 8) 当時のヴェルレーヌとマラルメの関係については以下の拙論を参照されたい。『『今日の人びと』(1878-1899)——ヴェルレーヌによる評伝とマラルメ像を中心に』、『仏語仏文学研究』第44号, 東京大学仏語仏文学研究会, 2011年12月, 89-110頁。
 - 9) 1883年11月2日付マラルメ宛書簡 (*Correspondance générale, op. cit.*, t. I, p. 819)。
 - 10) 架空の詩人「哀れなレリアン *Pauvre Lelian*」の名は Paul Verlaine のアナグラムであり、『呪われた詩人たち』で語られる彼の作品と人生は、ヴェルレーヌ自身のものである。*Lelian* にはアクサン記号がなく、原則に従えば「ルリアン」と発音されるべきである。しかしヴェルレーヌ自身書簡では何度も *Lélian* と書き、現在に至るまでアクサン付きの表記が広く流布している。『呪われた詩人たち』の本文における *Pauvre Lelian* の綴りはアナグラムの純粋性を尊重したためと考え、本稿では「レリアン」の表記を用いた。
 - 11) 4ページの小新聞『リュテース』紙に比べて『ラ・ヴォーグ』が、規模においても影響力においても大きかったことが一因であろう。またヴェルレーヌの連載は『ラ・ヴォーグ』も望むところであり、主幹のギュスターヴ・カーンは1886年8月頃、連載後の単行本を出版する権利を譲ってくれるようヴァニエに持ちかけたい (voir Paul VERLAINE, *Lettres inédites à divers correspondants*, éd. Georges ZAYED, Genève : Droz, 1976, p. 169)。
 - 12) 原稿の遅延が原因ではなく1886年8月24日付ヴァニエ宛書簡でも、すでに完成しているヴィリエの原稿に言及している (voir *Correspondance de Paul Verlaine*, éd. Ad. VAN BEVER, Paris : Messein, 3 vol., 1922-1929 ; Genève : Slatkine Reprints, 1983, t. II, p. 52)。1週間後のカーン宛書簡でも原稿を「お任せします」と書いており (*Lettre inédites à divers correspondants, op. cit.*, p. 169), おそらく『ラ・ヴォーグ』誌側のなんらかの事情あるいは思惑が関係したものと思われる。
 - 13) ヴェルレーヌとの契約では、おそらくこの増補版とは別に、第2集のみが初版(第1集)と同部数刊行されるはずであった。1889年8月11日付ヴァニエ宛書簡でヴェルレーヌは「貴君は契約(1886年10月16日)に基づき、第2集のみを肖像付きで253部刊行するはずでした。我々の契約に反して、同版は刊行されませんでした。なぜですか？」と詰問している (*Correspondance de Paul Verlaine, op. cit.*, t. II, p. 161)。

- 14) 1883年11月16日付モリス宛書簡 (*Correspondance générale, op. cit.*, t. I, p. 821)。
- 15) *Les Poètes maudits, op. cit.*, p. 47.
- 16) シャルル・モリスは後年、コルビエールの詩集『黄色い愛』の存在をヴェルレーヌに教え、『リュテース』紙の主幹レオ・トレズニクと3人で読んだ1883年初頭の日を回想している (voir Charles MORICE, *Tristan Corbière : conférence faite le 28 mai 1912*, Messein, 1912; repris dans Francis F. BURCH, *Sur Tristan Corbière*, Paris: A.-G. Nizet, 1975, pp. 164-181)。またデボルド=ヴァルモールの魅力を明かしてくれたのがランボーであったことは『呪われた詩人たち』の本文中に言及されている。
- 17) *Sur Tristan Corbière, op. cit.*, p. 175. ヴェルレーヌはモリスとトレズニクに『黄色い愛』を譲ってくれるよう懇願したというが、その願いは叶えられず、彼らから借りうけて「トリスタン・コルビエール」を執筆した。ようやく彼が『黄色い愛』の1冊をヴァニエの尽力で入手できたのは、『呪われた詩人たち』の単行本の刊行とほぼ同時期のことであり、1884年4月8日付書簡でモリスに報告している (voir *Correspondance générale, op. cit.*, t. I, p. 855)。
- 18) 1887年8月31日付ヴァニエ宛書簡 (*Correspondance de Paul Verlaine, op. cit.*, t. II, p. 161)。
- 19) «Villiers de L'Isle-Adam», in Paul VERLAINE, *Œuvres en prose complètes*, éd. Jacques BOREL, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1972, p. 770.
- 20) *Les Poètes maudits, op. cit.*, p. 64.
- 21) 1883年11月16日付モリス宛書簡 (*Correspondance générale, op. cit.*, t. I, p. 822)。
- 22) モリス自身、ヴィリエ・ド・リラダンに大きな興味を抱いており、後年『ルヴェ・コンタンポレーヌ』誌に『未来のイヴ』と『至上の愛』の書評を載せ、長文の評論も準備していた。
- 23) 1883年11月17日付モリス宛書簡 (*Correspondance générale, op. cit.*, t. I, p. 826)。
- 24) 同日の書簡でヴェルレーヌは、それらの初期作品群について「コベは間違いなく持っている、マラルメもだ。だがマンデスはもう持っていないだろう」と書き、また自分でも以前はそれらを持っていたが、ランボーとの交遊期に「アブサントとマニラ葉巻に」変えてしまったと告白している (*ibid.*)。
- 25) 1886年8月31日付カーン宛書簡 (*Lettres inédites à divers correspondants, op. cit.*, p. 169)。
- 26) 前掲拙論, 101-102頁参照
- 27) «Première conférence faite à La Haye», in *Œuvres en prose complètes, op. cit.*, p. 884. デボルド=ヴァルモールを「フランドルの女性」と強調しているのはオランダの聴衆に向けたサービスであろう。